事　例　5　　「百人一首」を覚えることで「わかる」こと

（1）課題について

本校では毎年1月末にカルタ大会が行われており、「百人一首」は2学期の挑戦学習の課題として、数年に1回は必ず提示されてきた。基本的には課題「百人一首」のねらいは歌の暗唱であるが、どの生徒が課題選択しても対応できるように、「カルタ取り」「坊主めくり」などの遊戯的なこともねらいの中に取り入れる場合もある。

「暗唱」をねらいとする生徒にとって、覚えることが目的となる学習の経験は少ないと思われたので、この課題では「覚えること」「記憶すること」そのものの経験を積ませたいと考えた。いろいろな覚え方がある中から、自分にとって一番覚えやすい方法を知り、自分なりの暗記の方法をつかみ取らせることを大きな目標とした。**（覚え方がわかる）**

生徒にとっては「百人一首」の100首という数は遠大な目標ではあるが、覚えた歌を数えられる分、わかりやすい目標設定ができる。また、いくつ覚えたか、何を覚えたかを生徒自身がわかりやすい形で整理していくとともに、自分の「わかっている段階」を認識させることも課題としたいと考えた。**（自分の段階がわかる）**

（2）選択した生徒の実態とそのねらい

今回「百人一首」を選択したのは、3年女子1名と1年男子1名の計2名であった。高等部では国語・数学等の教科学習は習熟度別の学習グループにわかれているが、この2人はともに最も高いグループに属しており、簡単な漢字を含めて短い文章を読んだり書いたりすることができる。特に3年生の生徒は、昨年にも同じ課題でパーフェクト合格を果たしており課題に対して非常に意欲的で、1年生もその姿に触発される場面が見られた。

①高等部1年男子　E男

実　態：教師のアドバイスもあったが「難しい課題だから挑戦した」という前向きな理由で課題選択を行えた。その分「難しい」という意識があり、課題に対する意欲面でも弱いところが見られた。普段使わない言葉や言い回しに慣れておらず、どこで切って読むのかわからず読みづらそうである。

ねらい：歌を正確に覚える
　　20首程度覚える

②高等部3年女子　F子

実　態：百人一首の課題は2回目であり、前回では60首ほど覚えた。大体覚えているが助詞や歌の途中が抜けたり、上の句と下の句が違ったりと、正確に覚えているのは60首のうちでもその4割弱程度に思われた。前回の合格で自信を得ており、学習に対しては非常に意欲的である。覚えている歌とそうでない歌の整理ができておらず、昨年度のカルタ大会で優勝したこともあって、自己評価が甘い。

ねらい：正確に覚えている歌の数を増やす
　　覚えている歌とそうでない歌を把握する

（3）練習の様子と手立て

個々の生徒に適した暗記方法を探る

Ｆ子は、「前の時は書いて覚えたから、私は何回も書きます」と自分なりに獲得した方法があったようなので、本人の決定を尊重することにした。

Ｅ男は、担任教師から、「表現会などのセリフの覚え方をみると、読んだり聞いたりして覚えるタイプだと思われる」という助言を受けた。さらに１学期の挑戦学習の担当教師から「万国旗の課題では、とにかく旗を見てその下に書いてある国名を視覚的に捉えて覚えていた」と聞いた。そこで、教師と一対一で読み合いながら覚えていく方法でいくことにした。

何首覚えたかが生徒自身にわかる（みえる）ようにする

Ｆ子は「百人一首」の課題選択が２度目だったこともあって、何を覚えていて何を覚えていないかを明確にする必要があった。そこで単語帳を用意したが、「書いて覚える」という意識が先に立って、単語帳のカード１枚毎に同じ歌を２回も３回も書いていた。そのため単語帳そのものの使用法から伝える必要があった。まず100首の歌を教師側がカードに書き写して、

正確に覚えている歌（緑色）・・・・・・・・・・・・・・・36首
単語で何文字か抜ける歌（黄色）・・・・・・・・・・・・・32首
センテンスで抜けるもしくは覚えていない歌（赤色）・・32首

とカードを３段階に分けて色別に表示した。本人の障害の特性もあって、三十一文字正確に覚えている歌だけを緑色に入れるというのは、要求水準が高すぎてせっかくの意欲を損ねると考え、助詞などの１字の間違い程度の歌は緑色に入れて数えた。この方法で、本人にも覚えている歌とそうでない歌が量的にもはっきりわかったようである。また、黄色にポイントを置いて正確に暗唱できる歌を増やすといった目標や、何を重点的に練習するかということについても教師と合意ができた。練習日には10首ずつ確かめを行って、緑色に色分けされた歌は１回、黄色は２回、赤色は３回ずつ書くようにした。

さらに、Ｅ男にも単語帳を作り、覚えた歌のカードのふちを緑に塗っていくことで、その数が日に日に増えるのが視覚的に確認できるようにしてみた。

生徒にとって覚えやすそうな歌から覚える・歌の意味を可能な限り教える

Ｆ子もＥ男も、本校で基本の３首としている「いにしえの」「あまのはら」「ひさかたの」の歌と「むすめふさほせ」の歌合わせて10首から始めたが、Ｅ男の方は機械的に覚えているという感が拭えなかった。５～６首はこのように覚えられても百人一首は類似の言葉が多いので、歌の数が増えれば混乱しだすと考えて、文法的なことはさておき「ある程度意味づけをすれば本人が実感できそうな歌」や「イメージしやすい歌」、「視覚的に絵として捉えやすい歌」をピックアップして覚えていくことにした。ある時「あきかぜに　たなびくくもの　たえまより　もれいづるつきの　かげのさやけさ」の１首を宿題に出したが完全に覚えてこなかった。しかし黒板にこの情景を書いて説明したところ１回で見事に暗唱することができた。絵を消した後でも、その授業の最後に復習させると、黒板をちらっと見て正確に暗唱していた。

「覚える」ことが自分の生活にどのようにかかわってくるのか伝える

高等部で２回カルタ大会を経験してきているＦ子に比べて、Ｅ男にとって「百人一首」を覚えることは単にまだ机上の学習でしかないようだった。頑張って覚えているＦ子の姿を見てＥ男も頑張っているのだが、普段の生活で見せるＥ男らしさが見られないのが気になった。そこで、９回あった練習時間の７回目に１度だけであるがカルタ取りを行った。Ｆ子が上の句の何文字かを聞いただけでカルタを数枚取ったことに、Ｅ男はいたく感心していた。また、取るのに時間がかかったが、自分の知っている歌を耳にして一生懸命取り札を探す姿も見られた。これで「百人一首」を覚えるということとカルタを取ることがつながったようで、練習を通じて初めてＥ男の笑顔が見られた。

発表では歌の初めの５文字を聞いて、その歌を暗唱するという形で行った。Ｅ男は言い直すこともあったが、単語帳の25首について全てを正しく暗唱することができてパーフェクト合格となった。Ｆ子は緑色と黄色のカードの歌から出題してもらい、１文字程度の間違いなら合格としてもらえるようにして発表を始めたが、昨年度よりも精度や歌の数は増えたとはいえ、練習時よりも間違えることが多かった。しかし、日常の頑張りが評価されて合格となった。

（４）考察

かつて、百人一首の練習中に繰り返し聞いた読み札の歌をそのまま暗記した自閉的傾向の卒業生がいたが、我々も含めて何かを「覚える」というのは、ある程度意識的な努力をともなう反復練習を要する。今回「百人一首」を選択した生徒２人は、その障害の特性は違っていたが、本校の中では知的に高いグループに属しており、意識的な反復練習が可能な生徒であった。学習の主体者は生徒である。教師ができることはその状況づくりであって、生徒が「できる」「わかる」状況を作ることが必要である。ある程度知的なことが理解できる生徒についての「覚える」学習を支援する有効な手立てを以下に考察してみた。

個々の特性を知る・生かす

百人一首の練習中に何度かＥ男にも歌を書かせてみた。書く方は漫然としており、５回書いても全く覚えていないということがあった。しかし、歌を絵として描けたもの、Ｅ男のわかる言葉で説明できたものについては、何回か読むと覚えることができた。Ｆ子は反対に意味を説明しても芳しい反応が返ってこなかった。その生徒の日頃の学習や生活状況から判断する特性はその担任や担当の教師が詳しい。教師同士で話し合って、その生徒特有の「わかり方」について交換する事が必要である。

「覚える」こと（学び）を生活の中に位置づける

覚えることは、必ずしも「わかる」ことではない。生徒の中には前述のように聞いているうちに機械的に覚える子もいる。しかし、その「覚えること」が自らの生活の中にどうつながるのかが経験できたり、イメージを伝えたりすることができるならば、「覚えること」の意味が「わかる」ことは可能である。そしてそれが次の学習意欲にもつながっていくと考える。

できたことばかりでなくできてないことも伝える

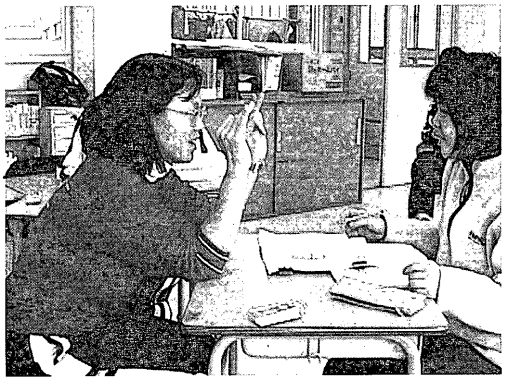
能力的に高い生徒の中には同級生などと比較して自信過剰となり、適正な自己評価ができないまま課題に対して曖昧な姿勢で取り組んでしまうことがある。自らの「覚えていないところ」や「わからないところ」をはっきりと示すことで、その課題を意識させ、効果的に取り組ませることができるようになると考える。

Ｆ子は昨年度カルタ大会で優勝したこともあって、「私は百人一首はほとんど覚えている」という根拠のない自信をもっていた。前回の練習ノートを見せてくれたが、それぞれの歌を３回から５回程度手当たり次第に書いていて、初めに間違って書き写した歌はそのまま覚えてしまうなど、努力が空回りしているように思えた。今回の練習で、単語帳を使って歌を色分けしたことで、Ｆ子自身に覚えている歌とそうでない歌がわかり、自らの課題がはっきりしたようであった。

学び合う姿を見合う

「覚える」ことがねらいそのものの学習は、本来楽しいものではないことが多い。一人で行っていると辛くなりがちな学習であるが、ともに励んでいる友だちの存在を知ることで頑張ることができることもあると思われる。「百人一首」の課題では毎回、前時間に覚えた歌を、生徒同士でお互いに最初の５文字を読みあって確かめる時間をとった。特に１年生のＥ男はＦ子のことを高く評価し、練習中はほとんど弱音を吐くことがなかった。知的障害の養護学校では、「学び合うこと（集団思考）」は難しいが、Ｅ男がＦ子の姿を見て努力できたように、「ともに学ぶ」ことのダイナミズムはどの生徒にも伝えていきたいと思う。さらに、「ともに学ぶ」ことは、将来作業所等での「ともに働く姿勢」にもつながっていくのではないだろうか。

（下　野　令　子）



五七五七七・・・